

イアン・パート、  
イギリス

# シュシャへの 畏敬の念



シュシャは私にとって長い間一種の  
ワンダーランドでした。

私は20年間、この都市の伝説に  
ついて聞いたり読んだりしてきました。その都  
市は、自然の美しさだけでなく、特に1880年  
から1920年にかけての国の啓蒙時代に、アゼ  
ルバイジャンで最も有名な文化人を数多く輩

出したことでも知られています。文学、特に音  
楽は、その高地から湧き出る山のように豊か  
に溢れていました。

1920年は、ボルシェビキの侵略によって国  
家の最初の独立期が終わった年だったが、シ  
ュシャの文化的影響は1991年に主権が回復  
されるまで続いていました。しかし、1年も経

## ジディル・ドゥズから見た溪谷の眺め



たないうちに、アルメニアの侵略によってこの都市は失われました。そして、28年間の国連の無力さとOSCEミンスクグループの調停の駆け引きを通じて、シュシャは到達不可能なままでした。

2020年9月、イルハム・アリエフ大統領は、もう我慢できないと決断し、ゴルディアスの結

び目を断ち切りました。その後の44日間の祖国戦争は、2020年11月8日、シュシャが解放されるまで続きました。シュシャ奪還の象徴性は大きく、最終的に残りの占領地すべてをアゼルバイジャンに返還するという合意に至りました。

こうして、バクーの自宅から西に道路で約

400 キロ離れたこの街を訪れるという私の希望がより現実的になり始めました。しかし、すぐに明らかになったのは、占領されていた 28 年間、アルメニアは開発よりも、無謀な破壊、あるいはよくても鉱物や資材の資産剥奪に関心を示していたということです。最悪の場合、何十万ものアルメニアの地雷が不注意な足や車輪を待ち構えているという事態もありました。

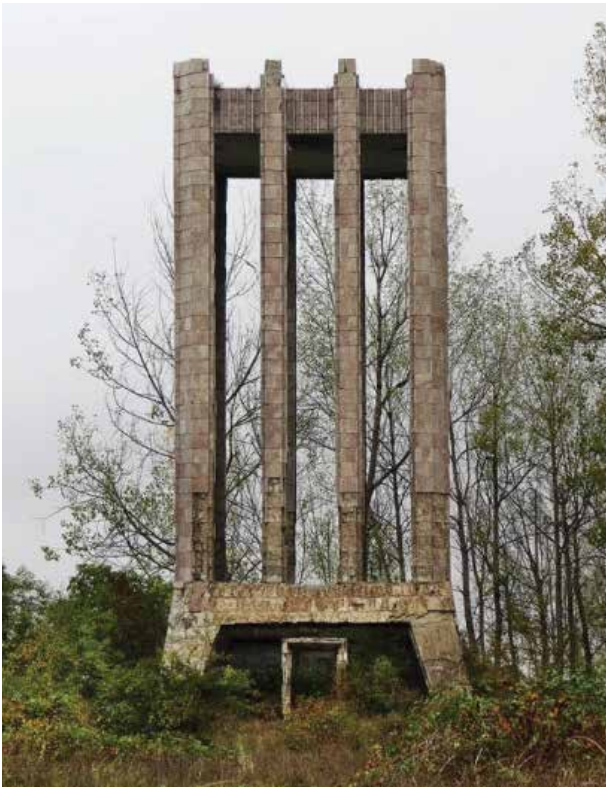
領土のほとんどが埋め立てられ、平和が回復したアゼルバイジャンは、地雷撤去業者に従い、インフラと公共事業の再建に意欲的に取り組み始めた。もちろん、私は、アルメニアの最初の侵略によって家や土地から立ち退かされた何千人もの国民が帰還し再訪する優先権を持っていることを受け入れました。私は友人たちに、イギリス人がそこに到着するチャンスがあるなら…と念を押しながら、ほぼ辛抱強く待ちました。

良いことは待つ人に訪れるとよく言われますが、2023年7月、私の2つのリマインダーが

実を結び、シュシャは夢から現実へと移りました。今年7月のさらなるフォローアップ訪問は、その時点でアゼルバイジャンのすべての領土がアルメニアの占領から解放されていたため、さらに注目に値しました。

最初の訪問はアゼルバイジャン作家連盟の支援を受けて行われた。それは、18世紀の詩人であり、その知恵と外交で尊敬され、第2代カラバフ・ハーンであるイブラヒム・ハリルの宰相でもあったモッラー・パナ・ヴァキフを祝うためのものでありました。ヴァキフは、詩の中で日常語と現実をテーマにしていたため、その後のアゼルバイジャン啓蒙主義の非常に早い時期の貢献者とみなされ、その作品は、ガシム・ベイ・ザキル(同じくシュシャ出身)やミルザ・ファタリ・アクンドフなど、19世紀の啓蒙主義の推進者たちによって高く評価された。

そのため、2023年7月14日から16日まで開催されたヴァギフ詩の日は、街そのものを体験し、この国の文化におけるその中心性を理解し始めるのに最適な機会でした。



18世紀の詩人M. P. ヴァギフの霊廟。左：占領中。右：2022年の修復後

休憩を含めバスでの移動は7時間かかりましたが、フズリ地方の以前占領されていた地域に入ると、最後の60分ほどはまったく新しい景色が私たちを取り囲みました。新しくできた Zefer Yolu (勝利の道) でさえ、十分に印象的でした。それ自体が驚異的で、非常に短期間で建設され、小コーカサス山脈の最も緑豊かな景色の中を曲がりくねって登ったり下ったりしています。高さは低いかもしれませんが、これは効果を妨げませんでした。それは、色彩豊かな創造と成長の喜びを自然が特に豊かに表現したものでした。道中ずっと、熱心に写真を撮りました。その日当たりの良い斜面に影を落とすのは、時折見られる放棄された塹壕と、長年使われていなかった廃墟となった建物の残骸だけです。

街に近づくにつれて、景色のドラマは違った様相を呈してきました。果てしなく続く曲がり角を曲がると、ダシャルティ村が見えてきました。この名前は「岩の下」を意味しますが、それには十分な理由があります。その背後に



カラバフ絨毯を背景にした記事の筆者

### カラバフ絨毯 – カラバフの貴重な遺産



は、シュシャの有名な高原、ジディル ドゥズ (ヒッポドローム平原) を支えるめまいのするような岩壁が立っています。この見解にはさまざまな反応が寄せられた。一方で、その自然は、目の前の谷の緑にこれほど驚くべき挿入物を作り出すことができます。他方では、2020年11月8日のシュシャ奪還にまつわる物語の思い出。アゼルバイジャン文化の発祥地へのさらなる被害を必死に避けるため、砲撃は禁止された。文字通り、街を手で奪う必要があったのです。この任務を任された者たちは、

国際メディアフォーラムでの大統領



軽火器のみを携えてその高みに登らなければならず、奇襲の要素(そのような攻撃方向を誰が予想できたでしょうか?)が彼らをやり遂げるのに十分であると信じていました。そう思いながら岩に近づいたとき、私の顎は落ち

ました。いったい彼らはどうやってそんなことをしたのでしょうか?

市内に到着し、設備の整ったホテルに落ち着くと、私たちは文化、特に音楽に焦点を合わせました。詩人でハーンの娘であるクルシド



バヌ・ナタヴァンの家の跡地を背景に、民族楽器で演奏される伝統音楽の野外コンサートは、その後続くさまざまな体験への理想的な導入となりました。自然や文化や歴史や占領や解放など。そして伝統…私たちはムガム音



楽の7つの様式、7人の詩人、7人の歌手からそれを聞きました。

絨毯博物館を訪れて、文化表現が(文字通り)家庭で紡がれ、シュシャの歴史に深く根付いていることを再認識しました。カラバフ絨毯の鮮やかな色彩と魅力的なモチーフは、シュシャの家庭で絨毯が生み出された創造性に畏敬の念を抱かせます。その後、サートゥリ モスクの涼しげな美しさが、これらの印象を振り返る静かなひとときを与えてくれました。

翌日、私たちはその岩壁の頂上、ジディル・ドゥズに連れて行かれ、自然の驚異の世界の景色を眺めることができました。空気を吸うことで、なぜこれほど多くのアゼルバイジャンの歌手や音楽家がそこで人生を始めたのかがわかりました。畏怖と喜び - 輪郭と色の両方の高さや深さの印象を他にどのように説明すればよいでしょうか？

北の低地を見下ろす眺めを1つだけ見ただけでも、少し憂鬱な気分になりました。遠くに、ロシアの平和維持軍の監視下で事実上まだ占領下にあるハンケンディ市が見えました。

帰り道、ミール・モースン・ナヴヴァブ(1833-1918)の墓に立ち寄り、この街の文

化的多様性に貢献したもう一人の貢献者に敬意を表しました。彼は詩人、芸術家、音楽史家、教師、出版社、そして文学・音楽協会の創設者でした。私たちは復元された墓石を見ていました。そして私は疑問に思ったのですが、ミール・モースンのどのような特質がアルメニア占領者にオリジナルを破壊させたのでしょうか？ いくつか質問があって、心の中には、創造と破壊というテーマがすでに形成されていました。これは、ホテル前の広場に点在する深夜の即興のオープンマイク形式の詩のパフォーマンスによってさらに強化されました。

そして最後の夜は、モラ・パナ・ヴァキフ(1717-1797)のために捧げられました。このカーンの宰相の名前は気難しい宗教的な印象を与えるかもしれませんが、彼は人間性のさまざまな側面を表現することを恐れず、アゼルバイジャンの詩における精神性だけでなくリアリズムの発展にとっても重要な人物でした。たとえば、ある詩では、結婚式で特定の女の子が踊るのを見たときの喜びと、彼女が踊らなかったときの完全な悲惨さを表現しています。

また別の話では、人生は必ずしも順風満帆ではないことを彼は認識しています。祝う余裕のない人や「心を輝かせる可愛い女の子」がいない人にとっては、休日ですえも辛いことがあります。

彼は世慣れた人物で、当時の難しい政治環境をうまく切り抜けられるようハーンを助け、特にエカチェリーナ2世のロシアやペルシャ暴れまわるペルシャのカジャール・シャーであるアガ・モハンマドとの関係構築に尽力しました。



詩人クルシドバヌ・ナタヴァンの家の廃墟

暖かく開放的な夜の空気の中、占領中に骨組みだけになった後、修復されたヴァキーフの霊廟の前で、ヴァキーフが文学界の先人や後継者たちと会い、議論する様子を描いた音楽と演劇が上演されました。本当に刺激的な環境で、つながりをたどり、外国人である私がアゼルバイジャン文学の継続性と発展を実感するのを助ける魅力的な方法です。

1週間後、グローバルメディアフォーラムに参加するために再びバクーに戻りました。今回はバクーから新しく建設されたフズリ空港へのフライトで移動時間が短縮されただけでなく、道路区間の最高の部分であるゼフェルヨルをもう一度楽しむことができました。また、私たちが宿泊した5つ星のシュシャホテルも楽しむことができました。

初日には大きなサプライズがありました。最初のセッションはイルハム・アリエフ大統領が主導することになりました。さらに新鮮なのは、その形式です。大統領は、200人ほどの国際ジャーナリストの集まりに短く親しみを込めて歓迎の言葉を述べ、その後、約3時間の質疑応答に答えました。詳細かつ的を射た回答が寄せられたセッションの後、アジアと南米の数人のジャーナリストが私に「彼のような大統領がいたらいいのに」と希望を述べました。ここで取り上げられたトピックを列挙するつもりはありませんが、国内問題でも国際問題でも、率直に取り上げられなかったり、取り組まれなかったりした問題はほとんど思い浮かびません。特に、

地域の平和と発展の必要性に重点が置かれていました。

翌日のセッションでは、多くのジャーナリストが人工知能(AI)の発展に懸念を抱いていることが明らかになりました。ソーシャルメディアでは「誰もがジャーナリスト」であり、匿名であることが多いため、倫理的・道徳的責任、事実確認などの問題が極めて重要になるという懸念でした。アゼルバイジャンは、国際メディアで自国の立場が十分に伝えられなかったり、誤って伝えられたりして苦しんでいました。国際ジャーナリストに、偽情報に対抗するための非同盟運動プロジェクトを準備するよう提案されました。

ジディル・ドゥズへのさらなる訪問(私にとって)もまた、爽快で絶対に外せないものでしたが、メフマンダロフの家ではシュシャの芸術の別の側面を垣間見ることができました。ヴァキーフ時代の音楽と詩に続いて、シュシャ

生まれの壁画家であり装飾画家でもあるウスタ・ガンバール・カラバギの作品が、占領による略奪のため断片ではあるものの展示されていました。シェキ・ハーンの宮殿の壁画も手がけたウスタ・ガンバールは、その素晴らしい技術に付随する色彩豊かなビジョンを明らかに持っていました。カラバフの素晴らしい絨毯のモチーフを思い起こさせる、彼の芸術的個性の別の側面を見るのは興味深いものでした。

自由時間に街を散策し、スカラ座で訓練を受けたオペラ歌手ブルブル(ナイチンゲール)、東洋初のオペラ作曲家ウゼイル・ハジベヨフ、女性詩人クルシバヌ・ナタヴァンの銃弾で穴だらけになった像が並ぶ広場を通り過ぎました。占拠者たちはこれらの像をスクラップ金属として売り、その後回収してバクーに保管し、帰国を待っていた。シュシャの象徴的なガンジャ門へ行き、ナタヴァンの家の残骸を間近で見ました。この家は女性詩人、篤志家、文学



作曲家ウゼイル・ハジベヨフ、詩人ナタヴァン、歌手ブルブルの記念碑が解放後のシュシャに戻ってきた



地雷除去後、解放された地域での再建が承認される



協会の主催者のために建てられ、後に音楽学校、美術学校、ナタヴァンの家博物館になったが、占拠後は廃墟となりました。住宅街を歩くと、次のような厳粛な注意書きが掲げられた廃墟の建物が目に入りました：

### 地雷なしを確認しました

#### ANAMA

国家地雷対策機関（ANAMA）が通行人に建物内に地雷がないことを知らせています。また、占領下でも残された美しさ、そして放置されたり損なわれたりした美しさを回復する作業が続いていることにも注目しました。

そこで私は、シュシャを囲む自然の美しさに感動し、畏敬の念を抱き、シュシャの人々がアゼルバイジャンの芸術と文化に歴史的に貢献したことに畏敬の念を抱き、多くのものを破壊した人々の手からシュシャを取り戻した人々に畏敬の念を抱き、文化とインフラの両方を称賛し、修復する人々の努力に畏敬の念

を抱きながら、2023年7月にシュシャを去りました。常に破壊よりも創造を優先します！

2024年7月に第2回グローバルメディアフォーラムのために再びそこを訪れました。テーマは再び緊急のものでした。「偽情報の拡散範囲の理解と耐性の構築。メディアリテラシーの促進」です。アリエフ大統領は再び、出席していた国際ジャーナリストに活発で広範な質疑応答セッションを提供し、議論を活発化させました。

しかし、私の訪問の合間に、この地域では非常に重要な進展がさらにあり、雰囲気は明白でした。第1回フォーラムのわずか2か月後、アゼルバイジャンは2023年9月19日と20日に、依然として占領されている地域で発生したテロ事件に対応して、それらの地域に進攻し、支配権を取り戻しました。こうして、国の領土保全の回復が完了しました。

今回、私たちはジディル・ドゥズに立ってハンケンディを見下ろし、その向こうを見下ろし



シュシャで長年の占領を経て、ハリ・ブルブル国際音楽祭が再び開催される

ながら、アゼルバイジャンの領土が完全に国家の管理と管轄下にあるのを見ました。



シュシャの要塞の門にいる記事の著者

セッションの終わりにラチンの町を訪れたことも、私にとって特に感慨深いものでした。

この町は、祖国戦争後の合意に基づき、2020年12月1日にアゼルバイジャンに返還されたが、占領地域とアルメニアの間に位置していたため、治安上の問題が続いており、元住民の手が届かない場所にありました。

私たちが到着したころには、町は復興中で、かつて避難していたアゼルバイジャン人の家族が戻ってきていました。その中には友人のユシフ・ミルザもいました。ユシフはアゼルバイジャンの偉大な芸術家の一人であり、私はアパートの壁に飾ってあるラチン村の彼の絵を長い間眺めていました。ユシフが愛情を込めて描いた赤い屋根の前に実際に立つのは、とても感動的な瞬間でした。私はイギリス人です。帰国したアゼルバイジャン人にとってこれが何を意味するのか、私には想像もつきません。◆